

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380925

研究課題名(和文)クライアントが効果を実感できる聴き方の支援：傾聴概念再考と傾聴教育プログラム開発

 研究課題名(英文) Supporting active listening methods that clients can realize effect:
 reexamination of active listening concept and development of active listening
 education program

研究代表者

花田 里欧子 (Ryoko, Hanada)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：10418585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、クライアントが効果を実感できるためにはセラピストはどのように聴けばよいのかを解明することである。(1)傾聴概念の再考：臨床心理面接コーパスを構築・活用することで、感情推移観測システムによるカウンセリングの傾聴評価、傾聴概念の把握、臨床学習への応用をはかった。さらに、マイクロカウンセリングとの対応や傾聴評価者による評価の特徴を見いだした。(2)傾聴教育プログラムの開発：(1)に基づいて、カウンセリングの学習者や現場実践者が役立てることのできる、傾聴にまつわる知識をテキストを通じて提供した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify how a therapist should be able to listen to a client in order to realize an effect. (1) Reconsideration of the concept of Active Listening: By constructing and utilizing the clinical psychology interview corpus, we evaluated active listening counseling by EMO system[EMOtionaL MOVement Observation system], grasped the concept of active listening, and applied it to clinical learning. Furthermore, we have found correspondence with micro counseling and characteristics of rating for each person who evaluates active listening. (2) Development of Active Listening Education Program: Based on (1), we provided knowledge on active listening, which learners of counseling and practitioners can use, was provided through texts.

研究分野：臨床心理学

キーワード：傾聴 臨床心理面接 臨床心理学 音声聴覚 情報科学 認知科学 マイクロカウンセリング 感情推移観測システム(EMO system)

1. 研究開始当初の背景

カウンセリングでは、セラピスト(Th)が聴いているつもりでも、クライアント(CI)はそう思えなかったり、聴いてくれていると思えても聴いているだけでなにも変わらないと不満に思ったりすることがある。このようなThの傾聴とCIの感情状態とのあいだで「ズレ」はいかに生じ、解消しうるのか？果たしてなにが達成されれば傾聴が真に成立したかが明らかではないという問題が指摘されており、傾聴概念の見直しやその養成は、心理臨床家教育上急務の課題となっている。

2. 研究の目的

CIが効果を実感できる聴き方を支援することを目的に、(1)傾聴概念の再考と(2)傾聴教育プログラムの開発に取り組む。(1)では発話・身振り・口振りと感情の評価値に関する定量的な観測データをもとに、質問技法や受容的な言葉かけが、どのように傾聴概念を構成するか、(2)では傾聴にまつわる「ズレ」を解消しながら「聴く」ために、Thが効果的に運用しうる知識を実践的に明らかにする。

3. 研究の方法

CIが効果を実感できる聴き方を支援することを目標として、(1)傾聴概念の再考と(2)傾聴教育プログラムの開発の2課題について、研究期間の全ての年度で取り組む。

(1)傾聴概念の再考：質問技法や受容的な言葉かけの特徴を、発話・身振り・口振りと感情の評価値に関する定量的な観測データをもとに明らかにするため、カウンセリングにおける対話データの整備をはかりつつ、これまで収集済みの対話データならびに新たに収集する対話データのマルチモーダルな分析による知識発見をすすめる。カウンセリングにおける対話データの整備...花田が所属研究機関(平成26年9月に京都教育大学から東京女子大学に転出)で実施。参加者は臨床心理学コースの大学院生。学習者はCI役とTh役を担当、より実践的な体験学習のため、予め用意された模擬事例ではなく、CI役は提示可能な実際の問題を訴え、Th役が対応。学習者のカウンセリングの様子を音声、動画、うなずきをとらえる加速度データとして同時計測、対話データを収録。学習者はデータを視聴し、実践への示唆を得(これまで、学習者からは、これらの計測系が自然な対話を妨げないと評価を得ている)、知識獲得のためのより精緻な検討を以下のようにすすめる。

対話データのマルチモーダルな分析による知識発見...発話・身振り・口振りと感情評価値の関連性分析(入野・古山)。1)感情状態の評価：整備した対話データについて、当該データのTh,CIが動画データに基づいて、感情推移観測システム(以下EMO system[EMOtionaI Movement Observation system])で感情評価値を連続的に入力。2)感情状態変化の共通性の分析他：Th,CI間で共通に感情評価値が変化する場面及びTh,CI間で異なって感情評価値が変化する場面につ

いて、定性的に何が起きているかを調べる(この食い違う部分こそが傾聴にまつわる「ズレ」)。さらに、線形回帰モデル等の統計手法により、物理量である、音声や頭部加速度の基本周波数やパワーから感情評価値が説明できるかを分析。上記について、カウンセリングへの影響や成否の点から解釈(花田)・知識化(井上)。(2)傾聴教育プログラムの開発：傾聴にまつわる「ズレ」を解消しながら「聴く」上で、Thが効果的に運用しうる知識を明らかにするため、(1)で見いだされた知識の学習者への還元と効果の検証を行う。学習者への知識の還元と効果の検証...得られた知識を学習者に還元したときに、学習者のカウンセリング技術に与える効果を、花田が半構造化面接、評価シート等で確認。加えて、知識還元前後でのカウンセリングの差異が、対話のどのような特徴量に反映されているかを入野、古山、井上の方法で評価。この学習者と研究者のプロセスの反復により、学習者に有用な知識の精練をすすめる。傾聴学習のために参照可能な資料(学習者用傾聴対話コーパス)として体系化。上記の(1)と(2)のプロセスを繰り返すことで、カウンセリングの技術向上を目指す学習者に資する知識のさらなる集積と提供をすすめる。

4. 研究成果

上記各研究項目に関して、以下のような成果を得た。なお、研究開始年度途中に研究代表者が転出し、研究実施場所の変更、研究体制の再構築等の必要があった。計画の遅延を最小限に抑えられるよう努力したが、なお生じた遅延による計画の変更や、目的をより精緻に達成するため、補助事業期間を延長した(平成26年度~28年度を~29年度に変更)。

(1) 傾聴概念の再考

カウンセリングにおける対話データの整備...44件の臨床心理面接を対話データとして整備。アノテーションの内容を次に示す。

(a)発話内容：44件のデータすべてについて、発話内容の書き起こしが完了。44データ中41件のデータがアノテーションソフトELANに入力済みであり、利用可能。また、書き起こしに従事した作業者と別作業者がチェック作業を開始。

(b)マイクロカウンセリング(以下MC)ラベル：評価者Aが20件、評価者Bが1件のデータについて、発話の区切りごとに、以下の技法が使われているか否かをラベル付与。

・視線、身体言語、声の調子、言語的追跡の有無

・閉ざされた質問、開かれた質問、はげまし(うながし)、いいかえ、感情の反映、要約、意味の反映の有無

(c)傾聴度合いの連続評価：EMO評価を3名の評価者が実施。評価者Aが44件を評価。また、評価者Aについては同データを2回評価することにより、1回目の評価と2回目の評価を比較することで、個人内での評価のぶれの程度を確認。評価者Bが19件、評価者Cが9件の

データについて評価。そのうち評価者 2 名は EMO 評価が大きく変動した時点(変化点)について臨床的に考察し注釈を付与。

(d)コンプリメント(褒める行為)：評価者 2 名が 9 件のデータについて、発話の区切りごとに、以下の技法の有無をラベル付与。

- ・コンプリメントを含む賞賛
- ・コンプリメントを含まない賞賛
- ・リソースへの言及(引用,いいかえ)

以上整備した 44 対話からなるカウンセリングにおける対話データは、大規模かつ複数の Th 及び CI による多種多様な事例を含むものである。これは臨床面接コーパスとして類する臨床研究プロジェクトや臨床心理学を学ぶ大学院生の体験的な面接実習において利用価値が高い。コーパス作成にあたっては、CI の大学院生はいずれも臨床心理学の実習の一環として参加を希望し、自身が記録されたビデオ映像・音声・身体動作データを、記録提供・公開することへの同意を得た。

対話データのマルチモーダルな分析による知識発見...主に以下の3つの観点による分析から知識発見を行った。1. EMO system を用いることによって、カウンセリングの傾聴評価ができるのか、セラピストの傾聴概念がいかに把握されるのか、振り返りの際の気づきや学習に役立つのか、について探索的に検討の上〔学会発表 4〕、2. EMO system によって付与した傾聴評価と、MC で付与したタグとの対応について考察〔学会発表 3〕、さらに 3. 傾聴評価者の専門家と非専門家の違いが変化点に与える影響を確認した〔学会発表 3〕。以下詳述する。

1.〔学会発表 4〕

方法：対象...計 2 対話。CI は臨床心理士養成大学院に所属する 20 代女子大学院生 2 名。それぞれの CI に対して心理臨床歴 5 年の 30 代男性臨床心理士と心理臨床歴 10 年の 30 代女性臨床心理士の 2 名が Th を担当。材料...面接の対話状況を損なわない程度に、話題を統制するための題材として、カール・ロジャーズによる「Miss Mun」の内容の一部を用いた。手続き...データ作成；CI は面接中 Miss Mun として面接に参加。データ収録；Th 役と CI 役の音声・ビデオ・頭部加速度を同時計測。評価：EMO system を用いて、収録されたビデオに対して、第三者が「傾聴」度合いを実時間で連続入力して記録。評価者は、収録された面接に無関係な第三者の 30 代男性及び 30 代女性の臨床心理士 2 名であり、どちらも心理臨床歴 5 年。まず、面接ビデオを見ながら上記の傾聴度合いを実時間で入力。評価終了後、その結果得られた EMO による傾聴評価値を時間の関数としてプロットし、その図面を見て、傾聴評価値が上昇()及び下降()した部分に着目させ、再度ビデオを見ながらその評価値を与えた理由を注釈として付与。

結果：心理臨床歴 5 年の 30 代男性臨床心理士による面接(事例 1)と心理臨床歴 10 年の 30 代女性臨床心理士による面接(事例 2)の分

析から得られた EMO 評価値とその上昇下降に対する注釈について、面接内容から解釈した。考察：EMO system の面接への活用...事例 1 は事例 2 よりも評価値が低く、また評価値の分散が大きい(上下の変動が著しい)。これより、初心の Th にしばしばみられる面接の効果や安定が保たれにくいことがあるといった特徴が、傾聴を軸とした評価の点からも一致した傾向として認められた。EMO 評価値と注釈との関連...本研究で評価者は EMO system 評価値の上昇下降部分のすべてに対して注釈を付与したわけではない。これは評価者が注釈付与の時点で EMO system の評価を上下させた理由をすべては思い出せない、あるいは説明できなかったからである。これには 2 つの可能性がありうる。一つは、EMO system による評価が、「その場ごとに判断することが求められ、深く考えることができないことも含め、実際の対話場面での判断に近い可能性」である。本研究でも、評価者は実際の面接場面での判断に近いかたちで、面接における傾聴度合いを評価したと考えられる。この場合、その時々感覚的に行った評価に対して、後でその理由を再度意識化して注釈することは困難であろう。もう一つは、評価者が意図しない評価が入力されている可能性である。EMO system では、ビデオと同期して評価値が連続量で収集できるが、評価値はビデオが再生されていれば評価者が評価を与えなくても一定の値が入力される。本研究で得られた評価値は面接内容について評価されたものであることを前提としているが、ビデオ再生のみによる、評価者の評価を反映していない値も生じうることに留意しておくべきだろう。以上より、EMO system による面接評価には、(1)面接進行中の事象に対してその都度浮かんで消えていくが面接の効果において重要となる評価を捉えている可能性、(2)評価者による面接の評価と得られる評価値が必ずしも対応していない可能性、がある。EMO 評価値による傾聴概念の把握...本研究では評価者 2 名による EMO 評価値を得たが、同一面接に対して評価しながら、事例ごとに評価者間で評価の仕方が異なっている。それぞれの評価値の変動をみると、傾聴について、評価者 RN は流れや状態として捉えているのに対して、評価者 Y0 は瞬間的ないしは作用的なものとして捉えている。この傾聴概念のズレは、本研究の教示方法によるものと考えられる。本研究では、傾聴学習支援の開発を目的とし、傾聴概念が EMO system 上で評価としてどのように示されるについて洗い出しを行った。そのため、傾聴概念を実験的に統制して評価をしてもらうのではなくむしろ評価者においてこれまでの教育や臨床の経験のなかで蓄積されている傾聴概念の日常的な理解に基づいて評価をしてもらい、それを浮き彫りにするねらいがあった。このことから、評価者は面接ビデオを見ながら評価軸を用いて傾聴度合いを評価するよ

うに教示され、傾聴の定義は与えられなかった。それぞれが有している傾聴の定義に従って評価を行った結果、評定者間の傾聴概念のズレが EMO system に反映されたと考えられる。このような理解のズレが明らかになるという意味でも、評価を時系列データとして定量化しつつ、定性的な分析と併せて総合的に理解していくことで、傾聴の理解が深まる。結論：本研究は各条件 1 対話による比較であり、今後臨床心理面接コーパスから同様のデータを抽出・分析を行い、さらに検証をすすめる必要がある。一方で、本結果は基礎データを提供し、心理臨床家教育における傾聴学習支援に向けた課題と展望が示唆された。まず、心理療法における諸技法の運用評価としての活用である。これまで心理臨床家教育に取り入れられている主要な方法の一つとして、MC では、心理療法のコミュニケーションの形を可視化しそれぞれ技法を命名している。傾聴についても、関連の諸技法を習得し自分のスタイルで適宜構造化し連鎖的に用いれば成立するという。MC は効果的な面接の構成要素を教える一方で、学習者は自身でそれらの運用をはかっていく必要がある。このとき要素の組み合わせ方やそれを面接場面のいつどこで用いるかといった運用が適切でなければ、面接全体の様相も損なわれてくる。これまでも面接の印象を数値的に評定する試みは存在していたが、トランスクリプトをもとに特定の発言にスコアを割り当てる等、連続的な変化は捉えられていなかった。本研究で用いた EMO system は、こうした要素を構造化したり連鎖的に用いたりする際に、その集合の全体としての面接の印象や雰囲気から、結果的に CI にもたらす感情の成否を評価する傾聴学習支援として役立つ。次に、評価すること自体が評価者にもたらす学習効果である。傾聴概念は評定者間で異なり、それは EMO 評価値によって把握されうる。本研究では傾聴を評価軸としたが、たとえば受容や共感等の臨床心理学の重要諸概念は、意味するところが深遠で評価者によって異なる。このような概念の評価について様々な立場の評価者間の一致や不一致、変化の方向性の相違を議論し、そのことへの自覚を促すことは、面接の基盤的な理解や実践の幅を広げることとなる。その際、評価の変化点について、音声の書き起こしに際して使用している ELAN 上のアノテーション機能により、そこでの発言に付随する身振りや口振り等の検討や、時系列データの周期性分析等によってより精緻な議論が可能となる。このように評価すること自体が傾聴をはじめとする面接の基礎を学ぶ機会として学習支援となりうる。

2. [学会発表 3]

方法：対象...計 3 対話。CI は臨床心理士養成大学院に所属する 20 代女子大学院生 3 名。それぞれの CI に対して心理臨床歴 5 年の 30 代男性臨床心理士と心理臨床歴 10 年の 30 代女性臨床心理士の 2 名が Th を担当。材料及

び手続き... [学会発表 1] 同様。分析...感情推移観測システム(EMO system)による傾聴評価；評価者は、収録された面接に無関係な心理臨床歴 5 年の 30 代男性の臨床心理士。[学会発表 1]における EMO system による傾聴評価では評価値を与えた理由を A,B,C...の通し記号を割り当てた注釈として付与した。一方、この A,B,C...の注釈は、評価者が図面上の評価値の上昇()及び下降()の見た目から付与しているので該当する面接中の発話箇所を特定することができない。そこで本研究では [学会発表 1] で付与した A,B,C...の注釈がどの発話に該当するのか、MC のタグとどのように対応するのかについて特定した上で、そこに付与された注釈を新たに A',B',C'...として記載した MC のタグ付け；EMO system による傾聴評価とは独立して、評価者は MC によるタグ付けを行った。本研究ではこのうち傾聴技法を発話へのタグとする。傾聴技法は、かかわり行動(視線、言語(的)追跡、身体言語、声の質/調子)とかかわり技法(閉ざされた質問、開かれた質問、はげまし/うながし、いいかえ、要約、感情の反映、意味の反映)から成る。本分析では両者の総数を扱い、種類の区別は行わない。音声の書き起こしに際して使用している ELAN 上のアノテーション機能によって、書き起こしと発話の開始/終了時間が載った Excel ファイルを作成、各発話について MC のタグにあてはまるものにチェックし、[学会発表 1] で作成した注釈 A,B,C...に該当する発話を特定し A',B',C'...として EMO 評価注釈に記載した。

結果：事例 A,事例 B,事例 C の該当発話箇所に付与された注釈と EMO 評価値ならびにそこでの MC のタグ総数をプロットした。

考察：EMO 評価値と MC のタグ付けとの量的関連...注釈が付与された発話における MC のタグ総数は、「(Miss Mun の冒頭の発言)」をのぞき、事例全体の平均値より大きい値を示した。値が突出しているところに注釈が付与されている一方、EMO 評価値は上昇()下降()の方向性を持つが、この方向性と MC のタグ総数は関係しない。評価値が上昇/下降すれば MC のタグ総数が増える/減るといったことはなかった。MC のタグ総数は傾聴度合いの上昇/下降については説明しないが、傾聴度合いの変化点を捉えている可能性がある。EMO 評価値と MC のタグ付けとの質的関連...MC のタグと EMO 評価値が一致しない箇所がある。たとえば事例 A の注釈 D' の発話は「はげまし/うながし」のタグが付与されているにもかかわらず EMO 評価値が下降しているが、その発話のみに注目するのではなく、EMO 評価値によって描出される全体の流れをふまえる必要がある。ここで EMO 評価値は下降しているものの、正の値(傾聴している)は保たれている。このことからここでの下降は、そこまでの EMO 評価値が特に高いことから相対的に低くなっているためとみなせる。EMO 評価値と MC のタグ付けは発話単位で一致する

場合と、ズレが生じた際は全体をふまえた上でそのズレが解釈可能となる場合がある。結論：本研究は3対話による検討であり、今後臨床面接コーパスから同様のデータを抽出・分析を行い、さらに検証をすすめる必要がある。一方で、EMO 評価値とMCのタグ付けが傾聴評価のための異なる視点を提供しうる可能性が示唆された。EMO 評価値は面接における傾聴の流動的なありよう表現する。面接の効果はEMO 評価値が一定して高いことによってではなく、傾聴の差異により経験される。その変化はMC技法の使用の多寡によって引き起こされる。このことが面接全体にリズムといったものを与えているなら、面接が退屈したり、躍動したりすることのきっかけとなっていると考えられる。こうした面接の内容というより形式に関わる技術は、面接の印象や雰囲気といったものとしてThの熟練や経験に拠るところが大きかった。本結果は心理臨床家教育における傾聴学習支援の観点から、面接全体の様相に関わる基礎データを提供し、成果と課題を展望した。

3. [学会発表1]

実験設定：臨床面接コーパス... [学会発表1] 及び [学会発表2] 同様。実験刺激となる面接映像... 臨床面接コーパスから、「Miss Mun」の内容を元に模擬面接を行った9対話のうちランダムに一つを選出し実験に使用。CIは臨床心理士養成大学院に所属する20代女子大学院生1名。心理臨床歴5年の30代男性臨床心理士がThを担当。傾聴度評価... [学会発表1] 及び [学会発表2] 同様。評価者は、異なる臨床経験(5年, 10年, 5年)を持つ3名の臨床心理士(RN, RH, Y0)。各臨床心理士評価者のEMO評価時系列データから評価の傾向が違っていた。そのため評価を平均化するのではなく、特定の評価者を基準として分析を行うことと、3人のアノテータの時系列の生データから何らかの共通点/相違点を抽出することが必要となる。ここでは、傾聴評価値の変動が、対話の転換点等重要な質的变化と関連性があると仮定して、その変化点に着目した。変化点自動検出... 変動の解像度が事前には明確でない時系列データからの変化点検出のために、多重解像度分析によって大局的な評価変動を取った。実験の目的と対象設定... 臨床心理士がつけた傾聴評価時系列データから自動抽出された変動の方向を、初学者がどのように判断するかを調べることが、今回の実験の目的である。また、この際、第三者のEMO時系列データ作成者が、なぜそのように評価を変動させたのかの情報とも対比して検討したい。そこで、今回はその理由の記述が得られたRNの変化点に関して実験を行うことにした。実験方法... 首都圏の女子大学心理系学科における臨床心理の授業の一環として、学部2年生73名(以下、初学者)を対象に実験を行なった。教室前方のスクリーンに、今回分析した動画を再生し、質問紙を用いて変化点番号1~11

の箇所を、上昇「」か下降「」で傾聴の変化方向の評価を求めた。この際、変化点時刻より30秒後まで再生したところで一時停止を行ない、評価時間を確保した。変化点番号と時刻が記されており、その次に評価の選択肢が用意されている。上昇の場合は「」、下降の場合は「」をつけて評価する。結果：臨床心理士と初学者の評価の比較を行い、初学者の評価結果をクラスタ分析によって分類、デンドログラムを表示し、類似変動があるかどうか対比。臨床心理士と初学者の評価の比較... 初学者による評価について、全体的に比較的上昇を選ぶ傾向にあること、前半部分で下降を選ぶ割合が比較的高いことが分かった。臨床心理士が評価した変化の方向と、初学者の過半数の評価結果の一致率が高いものはいずれも上昇であり、低いものはいずれも下降であった。初学者のクラスターリング結果... 初学者73名の全11問の評価をグループ間平均連結法によりクラスターリングし、おおよそどのような評価のパターンが見られるか検証し、さらに臨床心理士の評価がどれに類似するか比較する。SPSSでデンドログラムを作成し、2つのクラスタを得た。第1クラスタは64名、第2クラスタは9名の初学者が含まれた。臨床心理士の結果は第1クラスタに近く、一致する設問がより多い。臨床心理士同士での相違... RNの変化点は、第1クラスタのパターンと比較的類似していた。初学者のほとんどが第1クラスタに含まれていたことから(73名中64名)、このパターンは本面接の傾聴評価としておおまかな特徴のひとつを捉えているものと考えられる。一方一定のところから大きく変動するという点ではRNと共通する場合が多いRHについては、本実験では扱っていないために初学者との比較はただちにできないが、RNの変化点とおおよそ同位置のRN1-RH1、RN10-RH11では、評価結果は真逆になっている。つまり、第2クラスタはRNとは反対の評価であるが、RHとは傾向が一致する。このように専門家間でも評価はばらついている。質的な理由の一つは、面接を行なったThとの心理的距離もあるかもしれない。RHは指導的な立場にいた者で、RNは一度も直接会ったことがない者である。RHはThの言動に対し、より積極的に「このようにすれば良いのに...」という内的な評価が働いた可能性がある。面接終盤RNはRN11以降フラットに評価しているが、RHは所々下降させている。傾聴に関して理論的、技法的側面では一定の評価軸を持っていると想定される臨床心理士においても内的な影響を受ければ実際の評価はぶれてくる。本研究の成果と課題：臨床面接における傾聴度変化の評価の臨床心理士と初学者の比較のため、従来に無い新しい手法を開発した。実験の結果、2つの初学者の評価パターンが得られ、そのうち一方は臨床心理士との類似点を示された。本結果は一人の臨床心理士による評価との差異を検討したものであ

り、他の臨床心理士も同様ではない。このように、傾聴評価の場合でも単純ではなく、予測等の社会的信号処理を行う場合も、表層的ないわゆる信号だけではなく、内的な状態を定式化することは必須であろう。そのため今後、基準となる評価者を複数人設定した比較検討が必要である。感情評価は主観的であり、社会的信号処理をする際、参照する知識体系が異なる。本研究が示すように、臨床心理面接の熟練のみが評価を一義的に規定するものではなく、それは正解を定めにくいということである。感情評価の観点からエージェントを検討するにあたっては(例：傾聴対話エージェント等)、振る舞いの個人差を考慮の上ですすめていく必要がある。

(2) 傾聴教育プログラムの開発

学習者への知識の還元と効果の検証...学習者ならびに現場実践者対象とした〔雑誌論文〕や〔図書〕において、(1)の内容をときほぐして還元し、その効果を確認している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

(1)花田里欧子、& 中谷和人。(2018)。偶然と例外の心理臨床—些細ではない些細なことのために—。東京女子大学心理臨床センター紀要、査読あり、8、61-67。

(2)花田里欧子。(2017)。ミルトン・エリクソンと催眠—ブリーフセラピーの源をたずねる。Interactional Mind (2017) (pp. 5-6) 査読あり。北樹出版。

(3)伊東優、板倉憲政、& 花田里欧子。(2017)。エリクソン催眠からみたブリーフセラピーの実際。Interactional Mind (2017) 査読あり、10、37-75。

(4)花田里欧子。(2016)。ブリーフセラピーの最前線。In Interactional Mind (2016) (pp. 4-5) 査読あり。北樹出版。

(5)花田里欧子。(2016)。Gregory Batesonによる生の基準としてのメタ・コミュニケーションとその系譜—1946年3月第1回メイソン会議から1987年『天使のおそれ』まで—。社会言語科学、査読あり、19(1)、54-69。

(6)花田里欧子。(2016)。現代青年と「居場所」—家族心理学と家族療法の視点から—。東京女子大学心理臨床センター紀要、査読あり、6、47-53。

(7)花田里欧子。(2015)。ブリーフセラピストになるために。In 日本ブリーフセラピー協会 (Ed.), Interactional Mind (2015) (pp. 8-9)、査読あり。北樹出版。

(8)花田里欧子。(2015)。クレームをもつ保護者と会う教師へのコンサルテーション—家庭と学校の連携のために。In 日本家族心理学会 (Ed.), 個と家族を支える心理臨床実践 / 家族心理学年報 33 (pp. 49-58)、査読あり。金子書房。

(9)花田里欧子。(2014)。短期療法の基礎研究。In 日本ブリーフセラピー協会 (Ed.),

Interactional Mind (2014) (pp. 6-7)、査読あり。北樹出版。

〔学会発表〕(計4件)

(1)花田里欧子、中島隆太郎、井上雅史、古山宣洋、入野俊夫。臨床心理面接における傾聴度変化の評価—臨床心理士と初学者の比較、人工知能学会全国大会(第28回)、城山観光ホテル(鹿児島市)、2018年6月5日~8日。

(2)井上雅史、中島隆太郎、花田里欧子、古山宣洋、入野俊夫。コンプリメントのアノテーション、電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 (HCS)、東北大学電気通信研究所(仙台市) vol. 117, no. 509, HCS2017-95, pp. 11-15, 2018年3月13日~14日。

(3)花田里欧子、入野俊夫、古山宣洋、井上雅史、中島隆太郎。感情推移観測システム(EMO system)による臨床心理面接評価とマイクロカウンセリングのタグ付けとの関連分析。電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会、信学技報, vol. 116, no. 524, HCS2016-110, pp. 113-118, 東北大学(仙台市)、2017年3月15-16日。

(4)花田里欧子、入野俊夫、古山宣洋、井上雅史、中島隆太郎。臨床心理面接コーパスと感情推移観測システム(EMO system)を用いた傾聴学習支援、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会、信学技報, vol. 116, no. 436, HCS2016-60, pp. 5-10, なみきスクウェア(福岡市)、2017年1月27-28日。

〔図書〕(計2件)

(1)長谷川啓三、佐藤宏平、& 花田里欧子(Eds.)。事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談：中学校・高等学校編【改訂版】。遠見書房。(200ページ)(編著のため全ページに関与)

(2)長谷川啓三、花田里欧子、& 佐藤宏平(Eds.)。事例で学ぶ生徒指導・進路指導・教育相談(小学校編)。遠見書房。(194ページ)(編著のため全ページに関与)

6. 研究組織

(1)研究代表者

花田 里欧子(Ryoko Hanada) (東京女子大学・現代教養学部・准教授) 研究者番号：10418585

(2)研究分担者

入野 俊夫(Toshio Irino) (和歌山大学・システム工学部・教授) 研究者番号：20346331
古山 宣洋(Nobuhiro Furuyama) (早稲田大学・人間科学学術院・教授) 研究者番号：20333544

井上 雅史(Masashi Inoue) (東北工業大学・工学部・准教授) 研究者番号：50390597

(3)研究協力者

中島 隆太郎(Ryutaro Nakajima) (東京大学大学院・学生)